

令和3年度事業報告(音楽)

自 令和3年4月1日

至 令和4年3月31日

公益目的事業3(顕彰事業)

1. 「第52回サントリー音楽賞」「第20回佐治敬三賞」(2020年度)の贈賞

第52回サントリー音楽賞の三輪眞弘氏、第20回佐治敬三賞の「ペルセポリス 秋吉台で聴くテール音楽」「ぎふ未来音楽展「三輪眞弘祭 清められた夜」への贈賞式を10月14日(水)11:00よりサントリーホール ブルーローズ(東京都港区)にて開催し、賞金700万円(サントリー音楽賞)、各100万円(佐治敬三賞)を贈呈。佐治敬三賞受賞2公演の一部映像上演が行われた。COVID-19感染拡大防止のため、受賞関係者のみ出席とし、祝賀パーティは中止した。

2. 「第53回サントリー音楽賞」(2021年度)の選定

ア. 選考過程

- (1) 令和4年1月10日(月・祝)に、選考委員7名による第53回「サントリー音楽賞」の「候補者選考会」を芸術財団会議室に於いて開催した。
- (2) その結果、2021年にわが国の洋楽の発展に優れた業績をあげた人々として、候補者を選定した。なお、第19回よりノミニーの公表はとりやめることにしており、外部には一切公表していない。
- (3) 引き続き2月25日(金)に「受賞者選考会」をオンライン会議として開催した。選考委員7名による慎重かつ白熱した審議の結果、第53回サントリー音楽賞に、濱田芳通氏が選定された。
- (4) 3月31日(木)に開催された理事会において、正式に第53回「サントリー音楽賞」は、濱田芳通氏に決定した。

イ. 贈賞理由

中世からバロック初期までのヨーロッパ音楽は、絶えず外部世界との関係をさまざまな移動の中で保ちながら聖と俗、社会の上下、国や地域といった狭間で変容しつつけていた。濱田芳通が創る音楽は、そうした時代の姿を映し出す。天正少年施設がもたらした音楽に日本の現在の音楽の源流を探り、ペルーに赴任した司教による採譜から南米音楽のルーツを探ることで音楽のダイナミックな編成と流転の姿をとらえようとする。ヨーロッパ音楽へのグローバルな視点は豊かな知識に裏付けられながらも、そこから実演へと飛翔する際には最大限の想像力が駆使され、また影響関係のあらゆるネットワークを知悉しながらの思い切った即興性や一見異分子的な要素の突き合わせが行われる。それによって当時の音楽が思いもよらぬ生々しさと共にせまってくる。

卓越したリコーダー奏者、コルネット奏者でもある濱田は、同様の生々しさを自身の演奏によるヤコブ・ファン・エイクの《笛の楽園》における、愉悦に満ちながらも超絶的な技術の披

歴によっても、より直接的な感覚に訴えて追求しているが、近年のバロックオペラ上演では、楽譜から得られるあらゆる情報や、楽譜を超えた情報を取り込み、その生まれた時代の想像される環境に作品を再びおくことによって、そこに新たな生命力を吹き込み、新鮮な感動を与え続けている。その大胆な演奏形態は世界的な視野で見ても画期的である。2021年にとり上げた《メサイア》では、楽譜資料への深い洞察を踏まえながら、最小限の精鋭アンサンブルと合唱を用いて響きの上でも特筆すべき斬新さを打ち出し、機動性と柔軟性の両面に秀で、即興性、意外性に富んだ驚くべき演奏を披露した。作曲当時の上演習慣に則り、あくまでも作品の核心を突きながらも現代的な感覚での自在を見せ、これまで耳にしたことのない、現代に奔放に息づくバロック世界を作り上げた。それは本賞にふさわしい成果をあげたと評価できる。

- ウ. 選考委員 岡田暁生、片山杜秀、白石美雪、長木誠司、沼野雄司、船木篤也、松平あかね の7氏
エ. 賞金 700万円
オ. 贈賞 令和4年7月13日(水) サントリーホール ブルーローズ(予定)

3. 「第21回佐治敬三賞」の選定、贈賞

ア. 選考過程

- (1) 令和2年10月1日～11月30日および令和3年4月1日～5月31日の2回の募集期間に、令和3年(上期、下期)に実施される音楽公演についての応募を受け付けたところ、54企画についての応募があった。応募公演について選考委員8名が分担し公演の視察を行った。
- (2) 令和4年2月12日(土)、第21回選考会をオンライン会議として開催し、選考委員8名による慎重かつ白熱した審議の結果、第21回「佐治敬三賞」受賞公演に、「オーケストラ・ニッポニカ第38回演奏会 松村禎三交響作品展」「オペラ『ロミオがジュリエット』世界初演」の2公演が選定された。
- (3) 3月31日(木)に開催された理事会において、上記2公演を正式に第21回「佐治敬三賞」の受賞公演に決定した。

イ. 公演概要・贈賞理由

受賞公演1(開催日順)

<公演概要>

名称:「オーケストラ・ニッポニカ第38回演奏会 松村禎三交響作品展」

日時:2021年7月18日(日)14:30

会場:紀尾井ホール

曲目:松村禎三/ピアノ協奏曲第1番(1973)

「ゲッセマネの夜に」(2002/2005)

交響曲第1番(1965)

出演:指揮 野平一郎

ピアノ 渡邊康雄

管弦楽 オーケストラ・ニッポニカ

主 催： 芥川也寸志メモリアル オーケストラ・ニッポニカ

【贈賞理由】

オーケストラ・ニッポニカの「松村禎三交響作品展」は、《ピアノ協奏曲第1番》(1973)、《ゲッセマネの夜に》(2002/2005)、《交響曲第1番》(1965)を優れた演奏で聞かせ、昭和の巨匠の思考と感性を今の時代に突き付けた。

三つの作品は作曲年代が離れており、互いの語法に隔たりがあるが、60-70年代の松村の若いエネルギーが《ゲッセマネ》の熟したオーケストレーションと別物だというような印象を与えることはない。昭和の後半を駆け抜け、西欧前衛の影響を受けながら常に日本という皮膚感覚を強く意識し、個の確立を保ち続けて、技法以上の大きな世界観を打ち立て、神がかり的な書きぶりに至っている。その筋道が野平一郎指揮のオーケストラ・ニッポニカによってくっきりと浮かび上がった。

構造の不確かさは、個性的でユニークな対比や音形の連関に置き換えられる。フランス的語法に依りながらも、響きの追求というよりはむしろ構成上の節目に沿って楽器のメリハリをつけ、本来的意味でのオーケストレーションの多様性を掘り起こしている。特に

《ピアノ協奏曲》では渡邊康雄の風格あるソロが求心的な核となり、この作品が80-90年代に一世を風靡した現代日本独特のオーケストレーションの先駆であることが浮き彫りになった。

特殊奏法や倍音を異化する今日的響きのつくりとは異なり、ピッチの中で音色を作り、いわゆるハーモニー化された響きを反復音型の中で時間上に紡いでいく《交響曲第1番》は、今回の演奏によって特別に新しい局面をあらわにした。楽器間のバランスやフレーズの中のアクセントの妙味によって決して平板ではないテクスチャが打ち出され、指揮を担当した野平自身の音色感もあいまって新たな陰影が生まれ、これまでに聞いたことのない印象が松村作品から引き出された。

昭和の偉大な遺産を、あえて今日的な音響感のフィールドに置き、チャレンジ精神をもって取り組んだオーケストラ・ニッポニカ第38回演奏会は、作品の新たな価値を導き出しており、佐治敬三賞にふさわしい公演であった。

受賞公演2

<公演概要>

名 称：「オペラ『ロミオがジュリエット』世界初演」

日 時：2021年11月5日(金) 19:00

6日(土) 14:00、18:00

7日(日) 14:00

会 場：THEATRE E9 KYOTO

作 曲：足立智美

台 本：GPT-2 (原作 ウィリアム・シェークスピア「ロミオとジュリエット」)

演 出：あごうさとし

出 演：太田真紀、山田岳

曲 目：オペラ『ロミオがジュリエット』ソプラノ、ギター、電子音響のための
(2021 太田真紀・山田岳委嘱 世界初演)

アフター・トーク：5日足立智美、6日昼 太田耕人、6日夜小崎哲哉、7日三輪眞弘

企画・主催：太田真紀&山田岳

【贈賞理由】

オペラ《ロミオがジュリエット》は、足立智美が台本と作曲を、あごうさとしが演出を担当し、太田真紀の独唱、山田岳の演奏で初演された。自身、声や身体や自作楽器、電子機器を用いて演奏の現場に携わるパフォーマーである足立は、今回シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を学習させたAIによってネット上からこの原作に関する情報を集め、新たなテキストを生成させ、さらに邦訳させたものを基本的なテキストにした。その方法論は、足立による再編成を経ることによって、結果的に原作に依拠しつつも、まったく新しいオペラ台本を産み出したが、それは原作を換骨奪胎して新たなテキストを産み出すジェイムス・ジョイスやハイナー・ミュラーのような文学的・演劇的手法をAIとインターネットという今日的メディアを介して行ったものとも言える。その意味でこれは、ベケットの『しあわせな日々』を参照点とし、アングラ劇のイメージとも交差しつつ行われたあごうによる演出とあわせ、シェイクスピア作品を活かしつつ再創造した現代的な作品として、舞台創作史上にも確固たる位置づけを与えられるものでもある。

さまざまな文体とちぐはぐで荒唐無稽な意味内容からなるテキストから、太田は持ち前の多彩な声と声楽技術を駆使して、万華鏡のような語りと歌の世界を作り出し、山田はアヴァンポップからルネッサンス期のリュート音楽、最新のギター手法と前衛手法を横断する足立の音楽に対し、アコースティックギター、電気ギター、リュートを超絶的な技巧をもって自在にこなしながら、自らステージの一員として参画した。両者による総合的な舞台効果は観るもの・聴くものを圧倒した。

舞台作品の今をさまざまな観点から俯瞰し集約しつつ、新たな創作と秀逸な上演が行われたという成果から、本公演を2021年度の佐治敬三賞に相応しいものと評価するが、松村禎三作品への新鮮なアプローチを行った野平一郎とオーケストラ・ニッポニカの演奏会も本公演に勝るとも劣らない成果を上げたという理由から、2公演の同時受賞となった。

ウ. 選考委員 伊藤制子、伊東信宏、片山杜秀、白石美雪、長木誠司、野々村禎彦、船木篤也、水野みか子 の8氏

エ. 賞金 各100万円

オ. 贈賞 令和4年7月13日(水) サントリーホール ブルーローズ

4. 第31回「芥川也寸志サントリー作曲賞」の選考、決定、贈賞

2020年に初演された新進作曲家の管弦楽作品の中で最も清新かつ豊かな将来性を内包する作品を選定。最終選考はサマーフェスティバル2021の一環として、公開の場で行った。

第31回「芥川也寸志サントリー作曲賞」選考演奏会

8月28日（土）15：00～ サマーフェスティバルの一環として開催。

第29回受賞記念委嘱の稲森安太己氏作品を初演したのち、候補作品を演奏した。

演奏終了後、3人の選考委員が公開による選考を行って、1曲を選定し、第31回「芥川也寸志サントリー作曲賞」（150万円）を桑原ゆう氏作曲の『タイム・アビス』17人の奏者による2群のアンサンブルのための』に決定、贈賞した。

選考委員は、近藤譲、坂田直樹、原田敬子の3氏。選考会司会は沼野雄司氏。

なお、受賞作曲家には新作を委嘱（委嘱料100万円）し、完成後、当財団主催の演奏会で初演する。

公益目的事業4（助成事業）

1. 推薦コンサート活動

毎月1回、東西で選考会を開き、日本人作曲作品をとりあげたコンサートを推薦していた旧来の推薦コンサート事業は平成30年度で終了し、同年3月に選定され4月に開催された推薦公演へのチケットプレゼントをもって完結した。

第20回佐治敬三賞からあらたにスタートした「佐治敬三賞推薦コンサート」は、応募のあった公演企画の中から佐治敬三賞選考委員がメール会議により選定した。推薦されたコンサートは順次ホームページ告知し、抽選により各公演10名を招待した。

2. 楽器貸与事業

ア. 学生向け楽器貸与事業

世界的文化遺産である弦楽器名器を保全し次世代に継承するとともに、若手音楽家の育成、クラシック音楽の発展に貢献することを目的に、毎日新聞社主催の全日本学生音楽コンクール ヴァイオリン部門と提携して、「サントリー芸術財団名器特別賞」を設定している。

8年目となる本年度は、戸塚区民センターさくらプラザ・ホール（横浜市）にて実施された同コンクール、中学校の部（11月28日）、高校の部（11月29日）にて、選定委員が受賞者1名および推奨ヴァイオリンを選定し、3年間の無償貸与を令和4年2月より開始。

【第8回サントリー芸術財団名器特別賞受賞者および貸与楽器】

金子芽衣 Jean-Baptiste Vuillaume（1855年製）

【選定委員】

梅津時比古（毎日新聞社 特別編集委員）

藤井剛（毎日新聞社 企画・文化事業部長）

石井志都子（音楽家、全日本学生音楽コンクール諮問委員）

辰巳明子（音楽家、桐朋学園大学教授）

藤原浜雄（音楽家、桐朋学園大学院大学教授）

濱岡智（サントリー芸術財団専務理事）

イ. 演奏家向け楽器貸与事業

世界を舞台に活躍する若手日本人演奏家に5年間貸与する事業を平成30年度から開始し、現在以下の通り貸与中。

【貸与者および貸与楽器】

米元響子 ANTONIO STRADIVARI（1727年製作 ヴァイオリン）

田原綾子 PAOLO ANTONIO TESTORE（1728年製作 ヴィオラ）

3. その他の助成

ア. 活動助成

（1）音楽文献目録委員会 音楽文献目録出版に対して

（2）ミュージック・フロム・ジャパン 国際音楽祭開催に対して

イ. 運営助成

（1）日本作曲家協議会

（2）日本現代音楽協会

（3）日本演奏連盟

公益目的事業5（出版事業）

1. サントリー芸術財団設立50周年記念出版「日本の作曲2010-2019」WEB出版の刊行

周年事業として10年毎に出版している「日本の作曲」の2010-2019年版をWEB出版として刊行するため、前年度に座談会を4回（うち1回はオンライン会議）行なった内容を編集完成した。直近10年間の邦人作曲家の主要作品、作曲界の動向についてのレビューを中心とする内容。財団ウェブサイトから無料ダウンロード閲覧可能。

以 上